



アーサー・ゴールデン

小川高義=訳

*Memoirs
of a
Geisha*

by Arthur Golden

さ
ゆ
り

さゆり

アーサー

江苏工业学院图书馆

藏书章

小川高義 訳

*Memoirs
of a
Geisha*

上

文藝春秋

MEMOIRS OF A GEISHA
BY ARTHUR GOLDEN
COPYRIGHT © 1997 BY ARTHUR GOLDEN
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEISHUNJU LTD.
BY ARRANGEMENT WITH ALFRED A. KNOPF, INC., NEW YORK
THROUGH THE ENGLISH AGENCY(JAPAN) LTD., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

さゆり 上

一九九九年一月三〇日第一刷
一九九九年二月一五日第二刷

著者 アーサー・ゴールデン

訳者 小川高義

発行者 一原雅之

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三—二三

電話 〇三—三二六五—一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 大口製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当社負担でお取替え
いたします。小社営業部宛お送りください。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4—16—318330—4

妻トルーデイ、

二人の子供たちヘイズとテスへ

さゆり（上巻）●目次

さゆり 5

さゆり（下巻）目次

さゆり（承前）

謝辞

特別寄稿 日本語版への著者あとがき

アーサーはんのこと 名倉礼子

アメリカ産の花柳小説——訳者あとがき

装幀 大久保明子

題字 寺田文正堂

撮影 杉山拓也

さ
ゆり

(上
巻)

訳者覚書

一九三六年、ある春の宵、十四歳の私は父に連れられて、京都で舞を見に行った。いまでは二つのことしか覚えていない。まず、見物席にいた西洋人は父と私だけであり、つい数週間前にオランダから来たばかりであって、私は異文化の真っ只中に放り込まれた気分を抜けていなかったこと。二つ目は、何カ月か日本語の特訓を受けていたおかげで、まわりから聞こえてくる話し声が、とどころ意味のあるものとなり、ひどくうれしかったことである。舞台で踊っていた若い日本女性について言えば、色あざやかな着物だったという印象が、ほんやり残っているだけではない。それから五十年ほども後のニューヨークという時間も空間もかけはなれた場所で、あの舞台にいた一人との知遇を得て、数奇な生涯をメモワールとして口述してもらうことになることは、当時の私には知る由もなかった。

歴史家である私は、従来、メモワールを研究の素材と考えてきた。メモワールというものは、その語り手自身についてよりも、語り手のいた世界について、多くのことがわかるようにできていく。いわゆる伝記とは違う。伝記作者であれば当然ながら持っている視点を、メモワールの語り手は持ち得ない。もし自伝などというものがあるとしたら、草原を跳ねていく兎はどのような姿であるかと、その兎に聞くようなものだろう。わかるわけがない。だが逆に、草原のことを聞

きたければ、兎ほど適任の語り手もあるまい。兎の観察眼から外れたものは語れないと心得てさえいれば――。

そのような区別をつけて学問を成り立たせてきた私としては、自信をもって言っている。ところが、私がニッタ・サユリと知り合い、その回想を聞くにおよんで、いささか考え直さざるを得ないとも思うようになった。なるほどサユリは秘密の奥に隠れた世界を生きて、その物語を明らかにしてくれた。兎の眼から見た草原、と言ってもよからう。めずらしい芸者の生活記録という意味で、これ以上のものはないように思う。しかし同時に、サユリは自身に関する記録を残すことになった。その生活については、『日本の輝ける宝石』という書物が長々と一章を割いて論じているし、これまでに雑誌論文として発表された研究も多々あるのだけれど、ほかならぬサユリの語りこそが、抜きん出た情報量、精度、迫真性をもっている。少なくともこの例外的ケースにあつては、メモワールの語り手が、最もよく語り手を知っていたように思われる。

サユリが名を馳せるにいたつたのは、運命のいたずらによるところが大きい。似たような境遇の女性には、ほかにもいたのである。かの有名なカトー・ユキ――今世紀初頭、富豪ジョージ・モルガンの心をとらえ、妻となつて海を越えた芸者――などは、さらになお数奇な生涯をたどつたと言えるかもしれない。だが、ここまで完全に一生を記録にとどめたのはサユリだけである。かなり長いこと私は、彼女が記録に応じたのは、偶然に恵まれた結果だと考えていた。もし日本に暮らしたままであつたなら、生活の忙しさにとりまぎれ、メモワールを残すどころではなかつただろう。しかし、一九五六年、彼女の人生はアメリカに移住するという展開を遂げた。それから四十年の後半生をニューヨークのヘウォルドーフ・タワーズに居を定めて過ごし、その三十二階のスイートルームに優雅な日本風の空間を出現させたのだった。そうなる前から休む暇があ

ったわけではない。引きも切らずに日本からの芸術家、知識人、実業家が——あるいは閣僚さえも、またヤクザの親分も一人や二人は——訪れたのである。私が紹介されて知己となったのは、一九八五年のことではない。私も日本を研究対象とするのでサユリの名前だけは覚えがあったが、とくに予備知識まではなかった。それが次第に親しさを増し、打ちとけた話を聞けることも再々となつて、ある日、私は人生を語ってもらえないものかと切りだしたのである。

「そうどすなあ、ヤーコブさんが書いてくれはんのどしたら、おたの申しまひよか」という答えが返つた。

それで共同作業が始まつた。サユリは自ら筆を執るよりも口述したい意向を明らかにした。じかに話すことに慣れているので、聞き役もない部屋では仕事の進めようがないというのである。私も承知して、以後十八カ月にわたる口述が行われ、原稿が出来ていった。言葉のニュアンスをどうやって英語に訳そうかと悩んだ私は、かつてないほどサユリの京都方言——ゲイシャは芸妓と称され、キモノはおべべでもある——を意識するようになった。だが、とにかく作業の第一歩から、すでに私はサユリの世界に引き込まれていたのである。まずたいいは夕刻になつてから顔を合わせた。習性というもので、その時刻からサユリの頭が冴えるのだった。ふだんはヘウオルドーフ・タワーズのスイートで話したが、ときとしてパーク街にあるサユリが顔なじみの日本料理店で個室を借りることもあった。一度会うごとに二時間か三時間続けるのが、いつものペースだった。毎回テープレコーダーに収録したが、そのほかに秘書役の女性も同席して、きわめて忠実な筆記を行っていた。しかし、サユリはテープレコーダーにでも秘書にでもなく、かならず私に向かつて話した。進む方角に迷つたらしいとき、舵取り役になるのも私だった。私はこの企画の土台になつてゐるつもりで、私がサユリの信頼を得ていなければ彼女の物語は決し

て聞かれなかったろうとまで考えたものだが、いまにしてみれば見当違いであつたようだ。たしかにサユリは私を記録係に選んだが、じつは適当な人物があらわれるのを待っていただけなのかもしれない。

さて、そうなると問題の核心は、なぜサユリが記録を残す気になつたかということである。芸者に正式の守秘義務が課されているわけではないにしても、やはり芸者というものは、いかにも日本的な通念に基づいて存在している。すなわち、昼のオフィスで行われることと襖ふすまをしめた夜の部屋で行われることには何らの関わりもなく、それぞれに遮断、隔離されたことになっている。芸者は見聞を他言するものではない。芸者より下級と見なされる娼婦でも事情は変わらないが、世間では誰それとして名のある人物も、ズボンをはくときは、みな片足ずつであるということを知る立場にいるのが芸者なのだ。こうした夜の蝶が、おのれの役割を社会的信義の上から考えていることは誉められてよいのかもしれない。ともかく信義に背いた芸者は立場が危うくなるのである。サユリの場合には事情が違つていた。もはや日本にいる誰をも憚はばる必要がなかつた。すでに故国との縁は切れていた。それだけでも沈黙の束縛を解かれていた理由の一端は窺うかがえるが、なぜあえて語る気になつたのだろう。その問いを發することに私は踏み切れなかつた。もし彼女なりの道義的観点から話を中止されたらどうしよう——。原稿が出来上がつてからでも、まだ私はためらつていた。ようやく出版社からの前渡し金を彼女が受け取るにおよんで、もう訊いてもよろうと思つた。なぜサユリは生涯を記録したくなつたのか。

「この頃は、ほかにすることもあらしまへんさかいなあ」

たつたそれだけの動機だったのかどうか、読者の判断にまかせよう。

サユリが半生の記を残そうとする意志は固かつたが、いくつかの条件にこだわつたのも確かで

ある。自分が生きているうちは、そして人生に大きく関与した数名の男性が生きているうちは、原稿としたものを公刊されたくないと言った。結局、長生きしたのはサユリだったが、公開する内容によって誰にも迷惑をかけたたくない、と最後まで考えていた。登場する人物はできるだけ実名のままにしてある。しかし、私にさえ正体の明かされなかった場合もある。そんなときサユリは、花柳界の習いとして、客を通称で呼んでいた。たとえば「吹雪はん」のような名前——フケ性の頭に由来する——が出たとして、これをサユリの冗談にすぎないと解釈したら、真意をつかみそこなったことになるだろう。

テープレコーダーを使わせてほしいと言ったときの私は、もし秘書役の女性が筆記ミスをしたら困るという用心のつもりだった。しかし、昨年ついにサユリが亡くなってからは、私自身にはかの動機もあったような気がしてならない。私は彼女の声を保存したかったのではなかろうか。類稀なぐいまれなどというべき性質の表現力がこもっていた。通常はまろやかな声音こゝろねで話していて、これは宴席はしやに侍ることを職業にしたのだから当然とも思われようが、いざとなると七、八人も部屋にいかうかと錯覚させるほどに、まぎまぎと場面を描き出してみせた。いまでも私は夕方になると書斎でテープを聞くことがある。そして、いまだにサユリが世を去ったことを信じきれずにいる。

ヤコブ・ハールホイス

ニューヨーク大学アーノルド・ルーソフ講座教授（日本史）

たとえば庭のある静かなお座敷でこ一緒に、お茶でもいただきながら、遠い昔の思い出話をしたといたします。「これこれのお人と初めて会った日の午後は、一生のうちの最高でも最悪でもある午後でした」などと申し上げたら、きつとお茶碗を下に置いて、「おい、おい、どっちなのかね。いいのか悪いのか。両方ということはなからう」と、おっしゃいますでしようね。まあ、普通なら、恐れ入りますといつて笑うところなのでしょうが、本当に、私が田中一郎という人に会った日は最高でも最悪でもありました。それはもう素敵なお方に見えまして、手についた魚の臭みでさえ香水のようだったものです。あの人を知らずにおりましたら、芸者になったりすることもありませんでしたでしょう。

なにも芸者になるために生まれ育ったわけではありません。京都の生まれですらないのです。漁師の娘なのです。鎧戸よろいどという日本海に面した小さな町でしてね。でも鎧戸のことは、ほんの一握りの方々にしか申し上げておりません。子供の頃の家のことも、父や母や姉のことも——もちろん、どうして芸者になったとか、なってみてどうだったとか、そんなことは滅多に言えたものではございません。女三代の芸者だろう、乳離れするかしないかで舞を仕込まれたのだろう、というように、どちら様もお考えになつていたらしいのですが、ずいぶん前にこんなこともあ

りました。お座敷でお酌しやくしておりましたら、そのお客さんが、つい先週、鎧戸へ行ってきたんだとおっしゃいます。何というか、海を越えた渡り鳥が、行った先で、ひょっこり古巣の名前を出されたような具合でしょう。もう泡を食ったもいいところで、うっかり口走ってしまいました。

「ひゃあ、鎧戸で、うちの出所でしよどすわ」

すると、お氣の毒に、その方のお顔がくるくると変わったようになりまして、笑おうとするらしいのに、びっくりが先に立って、うまく笑いになりませんのです。

「なに、鎧戸の出！ 嘘うそだろう」

笑うことにかけてなら、とうに私のほうが術を磨いておりました。胸の内では「能笑い」と思っています。能面と同じで、表情を凍らせて固めたようなもの。これが役に立ちまして、男の方はどうとでもお好きなように考えてくださいます。せいぜい利用させてもらいました。で、この手に如かずと思いましたが案の定、そのお客さんは、ありったけの長い息をついて、いまお酌した盃をぐっと空けてしまいますと、たいへんな大笑いをなさいました。何だ、そんなことか、という安心の笑いでしたでしょう。

「こいつはいい」と、また大笑いです。「おまえが鎧戸みたいな掃溜はきだめの産だとは、バケツで茶の湯が立ったようなものだな」もう一回お笑いになっておいて、「これだから愉快でいい。どうかすると、おまえの冗談を真に受けそうになるよ」

バケツの茶と言われてもううれしいわけではありませんが、どこか当たっていたようには思いません。何だかんだいって鎧戸の育ちです。お国自慢の種もないところです。わざわざ行ってみる物好きもないでしょう。住んでいる人は、よそへ出そびれているばかり。だったら、どうして私が出てきたかと思われそうです。それが話の始まりなのです。